

蘭人中の攻勢的侵略的な人間によつて支持され
一八九九—一九〇二年の戦役の間は彼等はブ
ア(Been)人に肩を持つた。

新著紹介

○郷土研究圖譜 村落篇 第一輯 長野縣

小川内通敏編輯 東京本郷金助町四五五大塚巧藝社内 郷
土研究圖譜刊行會發行 昭和八年六月 會費二圓三〇錢
本圖譜は共同社會としての我國の村落の姿を寫眞と解説で
知らさうとして發行されるものだとのことである。其の企圖
されるものは各府縣朝鮮臺灣に亘つて五十五輯の豫定である
大出版である。第一輯の内容を通覽すると菊倍判二十葉の圖
譜で一葉の農家生活圖を除くと悉く美麗な玻璃版で別冊とし
て附するに四六倍判四三頁の解説を以てして居る。二十圖葉
中に收められた寫眞は四十種に達し、各種村落景観から農業及
副業の状態・民家・農家の生活・民間信仰に及んで長野縣に
於けるあらゆる農業生態を網羅してゐるに近いものがある。
解説には初め小むずかしい序説數篇の後に各圖に就いて説明
と圖葉にない或る部分の説明とが數十名の郷土研究家によつ
て興味深く與へられてゐる。圖は誠に見事であり説明は手に
入つたものであるが往々にして説明の理解し難いものが目に

つく。これは恐く解説者にはよく判つたことであらうが餘り
に讀者を物議りだと考へられて書いた爲めだと思はれる。つ
まりもつと平易に解説して欲しかつたのである。地理學の言
葉の使用を誤つてゐるのが時々ある。編輯者の嚴密な校訂が
必要であらう。一體かうした出版物を完成させるのは容易の
ことでなく、もつと民衆的なものなれば頒布も廣がらうが、
解説を見ても獨りよがりや樂屋落に似たものがないとは言へ
ないからこの點に注意されてこの難事業の遂行されるのを人
文地理學發達の上から希つて止まない。恐く充分の資金を有
して郷土研究圖譜發刊の緒に就かれたことであらうから中斷
して會員を失望させないことだらうと信ずる。(S)

○地理學論文集

田中啓爾著 古今書院發行
定價七圓五十錢

今秋の讀書期に於て、我地理學界に寄與された最も著しい
ポリウミナスな大冊子は、實に畏友田中教授のこの論文集で
ある。菊版九五六頁、圖版三八一、別圖三三版、かうした數
字をみる丈でも、本書がいかに博然として堂々たるものであ
るかを知らしめる。しかもその挿圖が珍らしい寫眞や、地形
圖のみでなくて、非常に手数のかゝつた、工夫されたカット
から出來てゐるのを見ると、凡そかうした挿圖のみについて、
幾百人の勞力を煩はしてゐるか窺ひしりえないのであつて、
我等はその明確にして器用な著者の編輯振りに對して自ら頭

の垂れることを覚える。本書收むる所は著者が最近十年間に所々へ講演されたものや、記念論文集又は雑誌に發表されたもの、凡そ三十七篇を収めてあるが、この他にも著者の勞作は多いといふことであるから、著者がいかに精力主義の人であるかを立證すると共にこれ亦多數の讀者をして自ら傾倒せざるを得ざらしむるであらう。論文集としての要項は第一信州に於ける鐵道開通前の鹽の移入路について、交通と商業との關係を明にし、つぎに中央日本の人文地誌を詳述し、轉じて横濱・東京の地誌に及び甲府・上越・北陸等の特殊人文地理現象を明にし、關西では和泉山脈・瀬戸内・讃岐等について論じてある外臺灣・朝鮮・滿洲・支那等について若干の所見を羅列し、最後に獨立科學としての地理學、最近の地理學の進歩を論じて著者の立場を明にしてある。筆者は如斯き大冊子が容易に出版さるゝ程になつた學界の進運を慶福し、著者が更らに現に努力中の多くの業績を寄與さるゝ日の近からんことを祈るものである。(藤川)

○朝鮮の聚落 前編

中編

朝鮮總督府發行

本書は善生永助氏が總督府の命をうけて調査せる生活狀態調査の一部分として朝鮮の聚落を取扱つたものであつて、著者がさきに出版された朝鮮の人口現象と相俟つて朝鮮の聚落を知る津梁である。前編菊版約一千頁、聚落の發生・聚落の名稱・聚落の種類・聚落の大小・聚落の高度・聚落制度・農村・山

村・漁村・都邑の十章をしめ各章數節に分つて叙述極めて詳密を極める。善生氏の如き篤學家に非ずんば能はざるものと感服する。中編も同じく菊版六百頁の尅然たる大冊であつて、朝鮮の聚落中特色ある移民部落・模範部落・新興部落・溫泉部落及び鐵山部落に就てこれ又詳述されてゐる。兩書を通じて我等は全く未知の世界の明にされたことを欣羨するの情に堪えない。總督府も亦かうした尅大な出版物を頒布せらるゝの雅慮を有せらるゝ點に於て敬服に堪えない。(藤川)

○經濟地理學方法論

川西正鑑著

時潮社發行

定價二圓八十錢

本書菊版三三八頁、二編より成立し第一編は經濟地理學方法論の現段階と其批判の方では今日までの多くの記述的經濟地理、地人相關説をとくラツエルやリヒトホーフエンなどの説明の缺陷及びその認識の不足等をウィットフォーゲルなどの所論によつて駁撃し、第二編に於て新しき角度に立てる經濟地理學の方法論といふものをのべてある。さうして結局地理的自然は現實の經濟機構との關聯に於て認識されるべきであるといふことを主張する本で、初歩の學者には難解であらうと考へらるゝ文字に富むだ書籍である。(藤川)

○高地理書一挿繪中心景觀的取扱

森信美著

南光社發行

定價一圓八十錢

本書は新に出来た國定教科書の高等一年用の地理書の挿圖百〇九個について、景觀地理的に詳細な説明を加へたものである。同科受持の教員諸君は本書を讀むことによつて、いかやうにこの挿圖を讀み且つ之を教えうるかを學ぶことが出来るのみでなく、小學校の地理科教員にして、更らにかうした方法で他の地理の讀本を教授する多大の參考を得られることゝ信ずる。著者自ら從來の刊行された挿繪の解説等すべて名所案内式で記載萬能であるのに代へ、挿圖によつて自然と人文との綜合した文化景觀をその取扱の對策とした。本書は、儲越ながらこの種の著作の劃時代的なものと自負されてゐることは亦亦妥當であると信じ、敢て本書を江湖にすゝめる。(藤田)

雜報

○國產桐の缺乏

桐材は割裂し難きこと、吸濕力の少きこと、燃焼し難きこと、糊着の良き事、狂の少きこと、輕軟なること等の特色があるために履物から家具指物に用ひられる。故に内地七千萬人の中五千萬人が桐下駄を一年に二足宛消費するものとするに二千萬圓、箆筒其他家具指物類等で五百萬圓、火鉢・琴・桐紙・建築等に二百萬圓を消費するから約二千五百萬圓内外の需要がある。所がこの桐材の供給が近頃

になつて激減してきた。蓋し一面に於て支那桐の輸入が民國内政のために、或は従前の亂伐のために、殆ど其輸入をたつたからでもある。支那桐の輸入は明治廿七八年の戰役で皇軍が威海衛を占領するや、御用商人が桐材を發見して之を輸入したので最初で、當時は二十五年生以上四、五十年生の桐材の立派なものが來たが、大阪では用ひたけれども、東京の方は國產桐が豊富であつたから使用されず、一向其輸入が進まなかつた。所が明治四十五年頃に國產桐の品薄といふ現象が生じた結果、支那產芝罘桐の輸入が再興し、青島からも良材が出だしたので大正二年頃から八年へかけて支那桐の輸入は最盛期に入り、毎年二千數百萬斤其價格五百餘萬圓の輸入を見た。しかし大正九年のバニツク以後相場の大暴落により奥地賣出しの桐材商はすべて破産してしまい、昭和六年以後になると關稅の引上げにより支那桐輸入は採算不能となり、さしも旺盛を極めた支那桐も、一場の夢となり、目下芝罘青島產を合し年額二百萬斤、三、四十萬圓に降つてゐる。面白いことはさうした支那桐輸入の際は所謂好景氣であつたが、日本國產桐の方も相場が上昇し大正三年頃三圓の九太が六圓にもなつて景氣がよかつたから、其產出も多く大正三年頃には全國で毎年二百九十萬本からの植栽を實行したが、八九年の好景氣時代には桐の價の高いために一年に四百八十八萬八千餘本を植ゑるといふ素張らしい時代を出現した。然るに俄かに不景氣はくる、東京の震災で市場は減入る、昭和四